

しかし、常に心にかかるものがあつたと言います。

「趣味だけに生きるのでは物足りない。何か誰かの役に立つことをしたかったのです。」

そんなある日、庭で見つけたドングリの新芽の、その不思議な形が大森さんの心を突き動かします。「子ども達に自然の美しさや不思議さを伝え、感動させてやりたい。その自然環境を保護し、残してやりたい」と強く思ったのです。その行動は迅速でした。孫の通う保育園に交渉して、園児や保護者達への自然観察指導がスタートしました。

小さな自然「ビオトープ」

大森さんの故郷は、東に伊勢の海を望み、かつては里山が広がる豊かな田園地帯でした。しかし今は石油コンビナートが建ち並ぶ三重県四日市です。少年時代の海辺で遊び、里山で虫を追った懐かしい記憶は、活動の原点なのです。「経済成長の名のもとに、豊かな自然を次々と破壊した、我々世代の責任も感じています。」

自然観察の輪は保育園から児童館、更には老人ホームへと広がり、今年(2005年)、一つの形となりました。それは「ビ

オトープ」(注)の建設です。保育園の井戸水を水源にして、メダカやオイカワが泳ぐ、手づくりの池や小川には自然の生態系が再現されています。

大森さんの熱意が園や保護者達を動かして、力を合わせて完成させました。楽しみや喜びを共有する新しい仲間ができたのです。

ホームのお年寄りや園児達との交流も生まれました。「無邪気な子ども達から私は生きるパワーをもらっています。」大森さんの笑顔は少年のように輝いていました。

東大農場のみどりを残そう

「退職後、時間にゆとりができたからか、それまで眠りに帰るだけだった地域にも目を向けるようになりました」環境白書を読み、市民講座にも積極的に参加して、やがて東大農場のみどりを残す市民運動に出会います。

「2003年、東大農場の千葉への移転が決まり、跡地のみどりを残そうという運動が始まったところでした。」ポプラ並木やサイロ、牛の放牧場、そして深い森をそのまま未来に残したいと、会員は600人を超えました。「とは言っ

も、実際動ける人は少なく、30代40代の人達の積極的な関わりを期待します。」

「あと10年は、貴重な自然環境を守る運動に力を注ぎたいですね」環境保護運動は、大森さんのライフワークになったようです。

地域に帰る

2007年をピークに、団塊の世代が地域に帰ってきます。「まず一步を踏み出す勇氣を持つて。社会で長く活躍したその能力は貴重、ぜひ地域に還元してほしいですね。」大森さんはエールをおくります。

「職場にはまだ男性社会が残っていますが、市民運動では男女は対等。同じ目的に向かったの仲間づくりは楽しいものです。」いきいきと語る大森さんの充実した体験談は、次に続く人達の大きな励みになると、確信させるものでした。

(注)ビオトープ(BIOTOP)

生命(BIO)場所(TOP)という意味の合成ドイツ語で、「野生生物の生息場所」の意味に使われます。